

# 小学校・生徒指導におけるキャリア教育の意義

東風 安生

Significance of Career Education in Student Guidance of Elementary School

Yasuo Kochi

北 陸 大 学 紀 要  
第44号(2018年3月)抜刷

## 小学校・生徒指導におけるキャリア教育の意義

東風 安生\*

Significance of Career Education in Student Guidance of Elementary School

Yasuo Kochi\*

*Received December 5, 2017*

### Abstract

It is to raise career education firmly in the guidance of the students of elementary school. As a way to that end, we not only hope for career education in classes such as subjects and areas, but also revitalize life guidance as the horizontal axis, while children do not weaken the problem consciousness about learning about career education. It leads to the continuation and heightening of problem consciousness while utilizing guidance of students in daily school life, and it leads to the lesson of the next subject / area etc.

### はじめに

平成 27(2015) 年 3 月に学習指導要領が公示され、日本の教育はあらたな段階に入ったと言えよう。そこで求められる学力とは、OECD（経済開発機構）が積極的に推進する 21 世紀型能力を反映したものであるかもしれない。新たな資質・能力をいかに伸ばしていくか。変化の激しい社会で自ら課題を見つけ考え、協働して、解決していく力を育てることが課題である。

その中において、小学校教育に目を向けると、外国語教育に関する話題やプログラミング教育など総合的な学習における新たな課題が注目されている。しかし、外国語活動が進んできた中での教科化であり、コンピュータクラブ等の課外クラブで BASIC などのプログラミング教育が実際には行われていた事実を見ると、学校現場ではこれに対応するような構えは少しずつだが培われてきていたように思われる。

小学校に勤務する教員と中学校に勤務する教員を比較した場合に、小学校の教育でこれまで不足していたと言われていた点は、こうしたことだけではない。現実には、大きな課題としてキャリア教育に関する研修が不足していた。児童が小学校を卒業するということは、生徒が中学校を卒業することと異なる意味が 2 つある。

1 つ目には、義務教育が終了することで、生徒の中には社会に出て、社会人として働くことも可能であること。

2 つ目には、義務教育が終了することで、高等学校等に進学する場合には自動的な進学先が教育委員会から示されることはない。これからの進路について保護者や教師と相談し

---

\*経済経営学部 Faculty of Economics and Management

て、自ら選択していく必要がある。

この2つの点は、生徒にとって大きな課題であり、指導者である中学校教師においても教育活動で力をかける部分としては大きな割合を占めることになる。逆からすれば、小学校教員にはこうした点での指導経験が不足している。私立中学校を受験したり、公立の中等学校を受験したりする児童と保護者に対して面談をしたり、事務的な手続きをする程度であった。

学習指導要領の改訂にともない、小学校・特別活動には「第2 各活動・学校行事の目標及び内容」の2内容の(3)一人一人のキャリア形成と自己実現において<sup>1</sup>、児童の現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成が求められてくる。また、社会参画意識の醸成や働くことの意義を理解することが必要とされる。

特別活動の領域の一つである学級指導等で、このキャリア教育の部分を任せておいてよいのだろうか。小学校教員の経験をふりかえっても、あらたなステージに立つ教育において、小学校の児童に対してどのようなキャリア教育が必要なのか、すべての教職員がチーム学校として取り組む生徒指導でどのようなキャリア教育が行われなければならないかを考察する。

## 第1章 進路指導とキャリア教育

キャリア教育は、平成23(2011)年1月に出された中央教育審議会の「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」で、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」<sup>2</sup>として、初めてその定義が示された。

この中教審答申では、学校現場でのキャリア教育について、その必要性や意義の理解が高まってきており、実際の成果が出てきていると評価している。その上で、何か新しい教育を指すものではないとしてきたことから、従来の教育活動のままであったり、「体験活動の重視」という側面のみをとらえて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものと見なしたりする傾向が指摘されていたとした。今後は、キャリア教育の本来の理念に立ち返った理解を教育現場が共有していくことが重要であるとまとめている。<sup>3</sup>

中学校の教育現場では、どうしても卒業に向かって進路指導の重要性が高まってくる。つまり、生徒一人一人の人生というスパンで考えるのではなく、目の前に迫った次の教育の段階をどうするのか、もしくは社会人として職をもって働く際にどうするのかといった目の前の課題を解決するための教育活動に奔走していた加減が大きいと考える。

そのため、キャリア教育という言葉で生徒一人一人の生涯にわたるキャリアの過程で自分の役割をしっかりと果たせるような教育をするよりも、進路指導というキャリア教育における一部分の教育のみに陥ってしまうことが多いと言える。

それを示すように、平成22(2010)年3月に文部科学省から発刊された『生徒指導提要』の冊子には、「生徒指導と進路指導」として、「進路指導は(中略)近年では、キャリア教育の推進の中に位置付けられ、キャリア発達を促す指導と進路決定のための指導が系統的に展開され、幅広い能力の形成を目指している」<sup>4</sup>としている。また、「学校において進路指導の中核を担う教員には、職業や産業社会に関する専門的な知見を有し、進路選択等を行う能力をはぐくむための技能等が求められることや、こうした考え方のもと、学校では、進路指導は生徒指導とは異なる校内業務として位置付けられていることから、本書では詳細については記載していない」<sup>5</sup>としている。

つまり、平成23(2011)年の中教審答申において「キャリア教育」についての定義が明

確となり、その教育の意義が確認されるまでは、進路指導はその専門的技能が求められていて生徒指導とは別の指導内容と位置付けられていた。さらに、キャリア教育が推進されている中で、進路指導からキャリア教育へと系統的になされると説明している。

今から7年ほど前であっても、この変化は驚きである。「キャリア」という言葉が独り歩きして、多様な使われ方をした時代には、キャリア教育自体が学校現場に浸透しなかった。進路指導が生徒指導の範囲とはいっしょにしない考え方の中で校務分掌が実施され、進路指導主任が位置付けられる学校経営が目立つ中では、キャリア教育に関する分掌が設けられることもなかった。

『生徒指導提要』には、進路指導についての詳細は平成16(2004)年1月の文部科学省「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議」報告書を参照されたいと但し書きまでが明記<sup>6</sup>してある。それほど、互いの教育のすみわけがあり、キャリア教育に関する関心は薄かったと言えよう。

## 第2章 生徒指導とキャリア教育

### 1 生徒指導とキャリア教育の関係性

国立教育政策研究所の生徒指導・進路指導研究センターが平成24(2012)年8月に発行した「キャリア教育を『デザイン』する」という全国の小中高等学校に配布された冊子<sup>7</sup>には、次のようなFAQが掲載されている。Q3には、以下のような質問と回答が示されている。

「Q3; 本校では生徒指導等で忙しく、キャリア教育を実施する余裕がありませんが…。」この質問に対する回答は以下の通りである。

「確かに、生徒指導等の日常の教育活動は多岐にわたり多忙感を伴います。しかし、日常の教育活動をキャリア教育の視点で見直してみると、多くのつながりを持っていることが分かります。(中略)課題を抱える児童生徒への指導で忙しい学校においても、日頃行われている指導について、キャリア教育における基礎的・汎用的能力の育成の視点で考え方や内容を整理して全体計画及び年間指導計画に位置付け、発達の段階に応じて体系的・系統的に指導することが大切です。このような指導で、キャリア教育を推進することができ、生徒指導等についても効果的な実践に結び付いていきます。」<sup>8</sup>と書かれている。

つまりキャリア教育で育成しようとしている力は、生徒指導においても効果を発揮するということである。平成24(2012)年の冊子で、国立教育政策研究所が生徒指導とキャリア教育の関係性について、明確にしている。キャリア教育で育成する力が、生徒指導でも児童生徒一人一人の力となるというのである。

文科省の発行する冊子や中教審の答申などの報告書が出てくる流れを見ると、平成11(1999)年に初めて国の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」<sup>9</sup>で、「キャリア教育」という用語が初めて登場してから13年間で、生徒指導とキャリア教育の連携の大切さを明確にしたのである。

平成11(1999)年当時は、キャリア教育については、家庭や地域と連携して、体験的な学習を重視する必要があると強調したり、各学校に目的を設定して、教育課程に位置付けたキャリア教育を小学校段階から発達に応じて実施したりする必要があるという改善の方策で、ふれられていた。

変化の激しい時代において、13年の年月が経過し平成24(2012)年には教員各人に対してキャリア教育のパフレットが配布される。そして、平成27年(2015)年の学習指導

要領では、キャリア教育という言葉が、特別活動解説編だけでなく総則<sup>10</sup>においても、示されている。「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」として、特別活動を要とした教育課程においてキャリア教育が実現できるとしている。

## 2 生徒指導とキャリア教育で育てる能力の接点

ここでは具体的にはキャリア教育によってどのような資質・能力を育成されるかはふれられていないところだが、特別活動解説編<sup>11</sup>ではキャリア教育のよって育成される力について多少の説明が見られる。

「また、特別活動は、望ましい勤労観・職業観を育成したり、児童が自ら現在及び将来の生き方を考えることができるようにしたりするなど、キャリア教育としての役割も有している<sup>12</sup>（後略）。」

「なお、低学年から所属する集団やみんなのために一生懸命働く経験を重視し、日常の積み重ねを通して、キャリア教育の一環として働くことの大切さや意義を理解させていくことは、児童会活動における学校に寄与する活動などの充実につながるとともに、望ましい勤労観・職業観を育て、公共の精神を養い、社会性の育成を図ることにもつながる<sup>13</sup>（後略）。」

この解説文からは、特別活動での学びはキャリア教育としての役割も果たしており、児童一人一人に望ましい勤労観や職業観を育てることになると言っている。また、公共の精神や社会性を育成するとも言っている。つまり、キャリア教育は小学生の児童にとっては遠い将来を見通した勤労観や職業観を育てることになる。

文部科学省は、平成 23（2011）年 5 月に発刊された『小学校 キャリア教育の手引き＜改訂版＞』<sup>14</sup>で、キャリア教育で育成すべき力は何かを明示している。それを見ると、キャリア教育で育成すべき力は、「〇〇能力」といった各種の能力論で「4 領域 8 能力」をめぐる問題を反省し、これに分析を加えて新たに「基礎力・汎用的能力」とした。これについては、平成 23（2011）年 1 月の中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」<sup>15</sup>に詳しい。

そこでは、「基礎力・汎用的能力」として 4 つの能力が示されている。現在のところ、この中教審答申で述べられた 4 つの能力（「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」）が、キャリア教育によって育成させるものとなっている。確認となるが、本研究はこうしたキャリア教育が育成する具体的な力がいかに小学校における生徒指導において大切なのかを確認していくことになる。

そこで、生徒指導における指導内容とキャリア教育で育てる指導内容の関連性を次頁の表 1 のようにまとめた。

これはあくまで試案である。関連性の強弱については指導者により、指導方針が異なる場合には、多少のずれが生じる場合があるかもしれない。しかし、生徒指導とキャリア教育の指導内容にどれだけの接点があるかを診るためには参考になるところである。

ちなみに、生徒指導の指導内容については、集団指導における教育的意義にしばって項目を挙げた。この項目は、『生徒指導提要』の「第 1 章 生徒指導の意義と原理」の「2 集団指導の方法原理（1）集団指導における教育的意義」<sup>16</sup>を参照した。

表 1 生徒指導とキャリア教育の指導内容の関連性について

キャリア教育 生徒指導	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
社会の一員としての自覚と責任の育成	関連性 強	関連性 強	関連性 中	関連性 中
他者との協調性の育成	関連性 強	関連性 中	関連性 中	関連性 弱
集団の目標達成に貢献する態度の育成	関連性 強	関連性 中	関連性 強	関連性 中

### 3 キャリア教育で育成する能力

キャリア教育で育成すべき力は、上記の表 1 で示したように、4つの能力によって構成されている。これらの一つずつ確認していく。また、この力は生徒指導で育成する力とどのように関連するかについて、考察を加えていく。

#### (1) 人間関係形成・社会形成能力

この力は、「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」と文部科学省は定義している。

小学生が将来社会との関わりの中で生きていく上で、基礎となる能力であると言える。現在の社会は、価値観が多様化し、性別や年齢などが多様な人材が社会で活躍している。その中で相手を認め、協働して活動する力が必要となる。また、変化の激しい社会においては、新たな課題を発見し、新しい社会を創造・構築していくための力として、人に相談したり、人から相談を受けたりして人間関係を深め、豊かなコミュニティをつくっていく力が求められている。

こうした能力を具体的に示すとしたら、コミュニケーション・スキルやチームワーク、リーダーシップなどがあげられる。

また、この力は生徒指導において、社会の一員としての自覚と責任感を培うことにつながる。また、生徒指導の集団指導における2つ目の柱である「他者との協調性」を育成することとも直接つながるものである。さらには、3つ目の柱である「集団の目標達成に貢献する態度」を育成することにも、人間関係を深め、豊かなコミュニティをつくるような力は、まさに集団の目標を達成することに貢献できるような意欲や態度の育成となる。

#### (2) 自己理解・自己管理能力

この力は、「自分ができること、意義を感じることに、したいことについて、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」

と定義している。

日本の児童生徒は、世界の先進国の児童生徒と比較して自己肯定感が低いという調査結果が出ている(第38回教育再生実行会議参考資料)(平成27年度国立青少年教育振興機構)<sup>17</sup>。国はこれを、やればできると考えて行動できる力が低い傾向にあると分析している。変化の激しい社会が今後、児童生徒が社会人になった際には予想される中で、多様な他者との協力や協働が求められるということは、自らの思考や感情を制御する力が求められてくる。一方で、自分自身についての理解を深めていくことができる力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に求められるものである。

具体的な力としては、忍耐力やストレスマネジメント、自分の役割理解や前向き思考などであろう。

また、こうした力を育成することは、生徒指導の視点から考えると、3つの柱のうちでも、特に社会の一員としての自覚と責任を育成する点につながる。社会の一員になるということは、自分自身を管理して、社会の中でどのように行動し発言していくか自己を分析して自己の思考や感情をコントロールする力が求められている。多様な他者がこうした社会にはいることが前提となると、ますます自己理解を深めて、その中で自分の個性をいかに活用できるか考えることが大切となる。こうした能力が、社会の一員としての自覚と責任を持つための力となると考えられる。また、忍耐力は他者との協調性をもつためには必須のものであり、前向きな思考や自身の役割理解は、集団の目標達成に貢献する態度の育成にはなくてはならないものとなる。そのため、キャリア教育で育成する「自己理解・自己管理能力」との関連性もあると言えよう。

### (3) 課題対応能力

この力は、「仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力」と定義している。

これからの多様な人々が活躍する社会においては、従来の方法や考え方にとらわれずに、物事を前に進めていくための力が求められている。これが課題を発見し、それに対して適切な計画を立て、課題を処理して、解決することができる能力である。

具体的には、情報処理能力や問題解決学習能力や評価・改善等の PDCA<sup>18</sup> をまわしていく力である。

こうした力は、生徒指導が育成する3つの柱からすると、集団の目標達成に貢献する態度の育成をねらいとする指導との関わりが強いと言える。なぜなら、集団として学校や社会で目標のために自分自身の個性を活かして貢献しようとする態度を育てる生活指導は、キャリア教育における基礎的・汎用的な能力の中でも、社会において課題を発見してそれを解決しようとする対応能力だからである。もちろん、社会の一員としての自覚や責任を育てる生活指導のねらいや、他者との協調性を育成するねらいと、この課題対応能力が関係ないわけではない。社会の一員としての自覚や責任感がなければ、課題を発見しようとする態度も育たずに、課題を見つけることすらできないだろう。また、他者との協調性が育っていなければ、ともに変化の激しい時代に協力や協働しながら課題に対応することは難しくなると推測されるからである。

### (4) キャリアプランニング能力

この力は、「働くことの意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて、働くことを位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用

しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力」と定義している。

小学校の児童も遠い将来ではあるが、社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる力と言える。

この能力は具体的には学ぶことや働くことの意義や役割の理解、多様性の理解や将来の設計、選択、行動と改善のできる力と言える。

また、このキャリアプランニング能力は、生徒指導で育成しようとしている中ではとくに関連性の強いものは見当たらないが、それでも社会の一員としての自覚と責任の育成という前提があつてこそ、一人一人は自分のライフプランを設計できるのである。また、社会という集団で自分の個性を活かして生きていこうとする場合には、集団の目標達成に貢献する態度の育成が不可欠となってくるだろうと推測される。

### 第3章 小学校の生徒指導におけるキャリア教育の必要性

#### 1 既存の教育活動を宝としてキャリア教育に生かす

小学生から将来のことを考えさせる指導は早すぎるのではないか。そんな声は平成に入った当時は、学校現場ではよく聞かれたものだった。校務分掌図を見ても、当時の公立小学校では、校務分掌として教務部や生活指導（生徒指導）部はあっても、進路指導部はありませんでした。当然、キャリア指導の部署など見当たらなかった。平成20年代に入り、行政の牽引により小学校の学校現場に、キャリア教育という視点が導入された。しかし、キャリア教育とはいっても、当時はまだ公立中学校でさえも、進路指導とキャリア指導が混同されていた時であるから、キャリア教育を進めると言っても何から手をつけてよいかわからない。特別活動において、上級生を見習って立派な中学生になりましようとか、よいお兄さんお姉さんになりましようという程度である。つまりは、将来が不確定な時期にどれだけ未来を見つめる指導をしても、それは絵にかいた餅になってしまい、実際にはどのような効果があるのか不明な点を指導者は強く感じたのだろう。それよりも、目の前の計算の分からない児童をどのように理解させるのかとか、国語の新出漢字を繰り返しドリルで確実に覚えさせることを優先してしまったと推察する。

そこで、小学校の学校現場で臨床的にすぐにでも求められている生徒指導の課題に対して、キャリア教育の実践が効果的だとしたらどうだろうか。「児童が規則正しい生活をするのなら、キャリア教育を進んで行いたい」とか、「いじめのなくなるクラスであれば、ぜひとも予防的にキャリア教育を実践したい」という声が聞こえてくる。

国立教育政策研究所の生徒指導・進路指導研究センターが平成24（2012）年8月に発刊したパンフレット「キャリア教育を『デザイン』する」<sup>19</sup>では、副題を「今ある教育活動を生かしたキャリア教育」という副題を付けている。その冊子の中では、「今まで行ってきた様々な活動に『宝（＝キャリア教育の断片）』はたくさんありますし、それは『〇〇教育』の『宝』でもあります。」として、いま既にあるものを活用するという視点でとらえなおすことを呼びかけている。つまり、食育や環境教育、金融教育や国際理解教育など、教科・科目や領域となっていない〇〇教育が、学校現場には多すぎると文科省も認めたうえで、さらにここにキャリア教育を新設するのではなく、新たな視点からこれまでの教育活動を見直し、その実践を宝として再評価して、キャリア教育の視点から系統的・体系的に見つめ直すことの大切さを説いている。

このため、キャリア教育を充実させるヒントは、この「今ある教育活動を生かしたキャリア教育」と言えるだろう。そこで注目すべき点は、生徒指導である。初等中等教育の学



校現場に立つ者は、教科等の指導と並んで生徒指導の力量が問われるところである。その生徒指導に効果を上げるものが、キャリア教育の視点であるということが分かれば、学校現場の教員は我先にとこの教育に対して、研修に加わり、積極的に実践にうつすだろうと思われる。

## 2 教科指導等とキャリア教育

諸富祥彦(2007)<sup>20</sup> は、小学校から中学・高校までのキャリア教育の必要性を早くから説いていた一人である。諸富は教育相談や教育心理学において学校現場の教員と共に研究を積み重ねていたこともあり、教員の忙しさと悲鳴に共感しながらも、生徒指導の中でも教育相談の手法に心理学的な側面を導入して、実際に教員に実践研究の成果として称賛されてきた。彼が、当時の生徒指導に必要なものとして、教育相談に加えてキャリア教育に焦点を当てていた。

表2 小学校でキャリア教育を実践するための9つのアイデア

キャリア教育のモデル	育成する力	授業タイプ	タイプ名
出会いの場セッティングモデル	出会いに生き方を学ぶ力	タイプ1	インタビュー
		タイプ2	キャリアモデルとのふれあい
		タイプ3	中学生とのふれあい
内省による夢づくり (自分づくり)モデル	夢見る力 自分を見つめ 選択する力	タイプ4	模擬的なキャリア設計
		タイプ5	自分の過去現在未来を見つめる
基礎的な能力育成モデル	コミュニケーション能力 達成する力 七転び八起き の力	タイプ6	いのちを感じる
		タイプ7	友達とのふれあいと協力
		タイプ8	集団の中での役割遂行
キャリア疑似体験モデル	社会や人に貢献することに 喜びを感じる 力	タイプ9	模擬職業体験

なぜなら、諸富は、当時の進路指導は小学生に対してまだ早いと言われていた時期に、上記のような9つのタイプのキャリア教育を、4つのモデルとして小学校で実践するアイデアを提示<sup>21</sup>している。ここで注目したいのは、それぞれのキャリア教育のモデルとなる授業は、どのような教科・科目や領域で実践されているかという点である。

「出会いの場セッティングモデル」の「タイプ1；インタビュー」は、小学校6年生の総合的な学習の時間「12歳のハローワーク」や、小学校3年生の社会科「ぼうけん発見まちたんけん」で児童が実際に行ったインタビューを取り上げている。

「タイプ2；キャリアモデルとのふれあい」は、道徳と学級活動を組合せた総合単元的道徳「夢を夢で終わらせないために」や、小学校6年生の総合的な学習の時間「達人との出会いから学び取ろう」で、学校に達人や先輩を招聘して直接的なかかわりを持つ活動を

している。

「内省による夢づくり（自分づくり）モデル」の「タイプ3；中学生とのふれあい」は、小学校6年生の学級活動「中学校へ向けて」で自分の過去・現在・未来を見つめて、自分のよさを知り、未来に夢を広げる指導をしている。

「タイプ4；模擬的なキャリア設計」は、小学校6年生の学級活動「どんな人になりたい、どんな仕事につきたい」は、小学校の卒業学年として卒業に向けて互いに認め励ましながらキャリア設計を行ったり、小学校6年生の学級活動「夢の計画図」で、国語科で学んだことを基に自分の将来の設計図を作成したりする学習である。

「タイプ5；自分の過去現在未来を見つめる」では、特別支援学級の総合的な学習の時間「こんなに大きくなったよ」が取り上げられ、互いの成長を確認し大切に思う気持ちを深めている。また、小学校2年生の生活科「明日のへのジャンプ」では、小さい頃の自分について家族から聞いて成長のプロセスを文章化して表現する。また、小学校2年生の道徳「ぼくのたんじょう日」では大切な命について一人一人がふりかえる学習活動である。

「基礎的な能力育成モデル」の「タイプ6；いのちを感じる」では、小学校2年生に学級活動の時間に「食べ物に感謝しよう」という単元や、小学校6年生に道徳の時間に「生きる」という主題で妊婦さんとのふれあいをふりかえる学習をしている。

「タイプ7；友達とのふれあいや協力」では、小学校4年生で学級活動「友達のよさを見つけよう」で日々の帰りの会で第4章 小学校の生徒指導におけるキャリア教育の必要性のありがたさをふりかえる活動をしている。また、小学校3年生の算数「調べたことをグラフに表そう」では、友達と協力して調べたことを他のグループにわかりやすく発表する活動を通して友達との学び合う楽しさを学習する。

「タイプ8；集団の中での役割遂行」では、小学校3年生の学級活動「係活動パワーアップ大作戦」で、なかだるみの係活動を責任をもってやりとげる工夫を話し合っている。また、小学校5年生は道徳「集団の中での役割を自覚して」という主題で学級での自分のこれまでの役割をふりかえて今後の実践意欲を高めている。小学校1年生では生活科で「うちのひとといっしょにしよう」という単元で入学した学校でどのような仕事ができるか家族と相談する課題をあたえて解決しようとする学習をしている。

最後に、「キャリア疑似体験モデル」では、「タイプ9；模擬職業体験」では、小学校3年生の社会科「買い物ゲームでよいお買物进行しよう」では、スーパーマーケットで働く人の活動を模擬体験して売り手と買い手の視点を考える学習をしている。また、小学校5年生の社会科「生活に役立つ車を開発しよう」で、工場で車を開発する人の視点にたって具体的な生活に役立つ車はどういうものか会議をしながら検討する模擬体験をしている。さらに、小学校6年生の総合単元的道徳学習では、「働く体験をしよう」という主題で、職場体験を実際にしたあとで道徳の時間にそのふりかえりを行っている。

こうしてすべての実践を見てきたときに、気付くのは、国語や理科、算数といった教科ではなく、学級活動や総合的な学習の時間、生活科などの体験的な活動を中心とした授業を構成しやすい教科や領域が目立つことである。

キャリア教育を小学校の授業で実践するためには、こうしたことから活動を中心とした教育活動が必要となると言えるだろう。

### 3 教科指導と両翼となる生徒指導におけるキャリア教育の可能性

一方で、翻って見れば、生活指導は、すべての教科・領域の活動の中で、行われているものである。授業中に学習活動の中で、基本的な生活習慣を基盤とした授業において徹底されるものが生徒指導である。また、学級経営の根本には、生徒指導との一体化が求めら

れている。さらに、学習中の児童同士のトラブルやもめごとの解決には、教育相談や個別の児童への指導が関わってくる。

活動型の学習において、こうしたキャリア教育が有効だということが諸富の研究報告から分析できた。教科指導と両翼を担う生徒指導は、まさにこの活動において指導していくものである。つまり、教科・領域等の授業だけでなく、学校生活全体にかかわる生徒指導の中にあつてキャリア教育を考えていくことが、今後は求められていくと言えよう。

生徒指導は、教科のような学習指導案等を立案することがなく、集団指導と個別指導や即効性を求めたり、学年でチームを組んで実施したりするために、十分なキャリア教育の指導計画が練られていない現実がある。

## 第4章 コンピテンシーの育成へ向けたキャリア教育の大切さ

### 1 大学教育におけるコンピテンシーの位置付け

大学教育の改革が本格的に始まったのは、平成10(1998)年の大学審議会の答申<sup>22</sup>において、「課題探究能力の育成」を大学教育に求めるところから始まったと考える。平成15(2003)年には人間力戦略研究会の提案により、「人間力の育成」が大学教育に課せられたものであるとの提言<sup>23</sup>が表明された。さらに、平成18(2006)年には、経済産業省の大学教育に関する研究会が、「社会人基礎力の養成」なる報告書<sup>24</sup>を出し、経済界から求められる大学卒業時の能力を位置付けた。平成20(2008)年には中央教育審議会から「学士課程教育に関する答申」<sup>25</sup>が出され、いわゆる「学士力」という大学卒業時における能力の水準が明確にされた。

学士力とは、教育を身に付けた市民として行動できる能力のことをいい、中教審では4つの柱で示している。「知識、理解（文化、社会、自然等）」「汎用的技能（コミュニケーションスキル、数学的スキル、問題解決能力）」「態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任等）」「総合的な学習経験と創造的思考」としている。

ところが、教育の世界的潮流はこれにとどまらず、初等教育から高等教育までを俯瞰して系統的・体系的な新たな資質・能力の育成が求められるようになった。そのきっかけとなったものは、OECD（経済協力開発機構）の提唱するキーコンピテンシーであると言えよう。これが、日本においては21世紀型学力と呼ばれるようになり、教育内容中心から汎用的能力を重視する方向へと転換が始まり、知ったことを活用して実社会で柔軟に問題解決ができる力の育成が重視され始めた。

平成24(2012)年度の国立教育政策研究所教育課程研究センターにおけるプロジェクト研究調査研究報告書「社会の変化に対応する資質・能力を育成する教育課程編成の基本原則」<sup>26</sup>を見ると、21世紀型能力として、基本力・思考力・実践力が同心円の中で次第に大きくなっていくイメージ図をもとに、新たな学力として3つの柱が示された。

この報告書を受けて、文部科学省では中教審において有識者会議「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」（座長 安彦忠彦<sup>27</sup>）を13回開催した。そして、中間報告を論点整理<sup>28</sup>という形で社会に示した。そこでは、平成8年当時、中教審第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で初めて日本において「生きる力」が示されたが、それを構成する具体的な資質・能力の明確化が不十分であったという反省を出した。そして、見直す視点として、「児童生徒に育成すべき資質・能力の明確化」と題して、各教科でどのような教育目標・内容を扱うべきか、指導の改善を図るための学校評価はどうあるべきかを課題として明記した。そして、この課題

を解決するために、あらたな育成すべき資質・能力として3つの柱を提示した。

1つ目が、言語や数、情報を扱う基礎的なリテラシー。2つ目が、思考力や学び方の学びを中心とする認知スキル。3つ目が、社会や他者との関係やその中での自律に関わる社会スキルである。国立教育政策研究所では、この3つの柱を新たな学力とするだけでなく、21世紀型能力として、社会人としても活用する汎用的な能力と定義する。小学校から始まって大学教育までの力は学力と呼ばれるかもしれないが、卒業してからも激しい変化の時代を生き抜く力は学力ではなく能力として定義している。

初等中等教育では、小学校では平成32(2020)年度から、中学校では平成33(2021)年度から新しい学習指導要領による教育課程が全面実施される。そのため、新しい学習指導要領で示された育成すべき資質・能力が、より具体的に示された。

- ア. 何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）
- イ. 理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成）
- ウ. どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

この中で、「ウ. 学びに向かう力・人間性等」と学習指導要領で示された学力は、21世紀能力として中教審で示された基礎的・汎用的能力のうち、3つ目の社会や他者との関係やその中での自律に関わる社会スキルに該当する。つまり、初等中等教育で育成する新たな資質・能力の一つである「学びに向かう力・人間性等」という学力は、高等教育における21世紀型能力の「社会や他者との関係やその中での自律に関わる社会スキル」という能力に系統的なつながりを見せている。

この育成すべき資質・能力を、21世紀型能力の中でも、コンピテンシーとして位置付けることとする。大学教育では、学士力の育成による改革がはじまってから、初等中等教育に先駆けて、学士力育成への改革が21世紀型能力の育成へと同時進行しながら変貌をとげ、ついには21世紀型リテラシーとコンピテンシーとして、注目を浴びるようになったのである。

## 2 キャリア教育のコンピテンシー育成に向けて

大学教育におけるコンピテンシーの育成が注目される要因として、世界的な育成すべき資質・能力の改革の波<sup>29</sup>があることがわかった。そして、これは日本でも他人ごとではなく、最新の学習指導要領の改訂にもこの方針が生かされており、一方で大学教育改革にもすでに反映されていることであると確認ができた。

そのため、初等中等教育で教育改革の新たな動きとして注目されている小学校におけるキャリア教育は、大学教育におけるコンピテンシーの育成にどのようなつながるのだろうか。そこで、再度キャリア教育において具体的にどのような学力を育成するかを確認する一方で、それが大学教育におけるコンピテンシーの育成とどのようなつながるかを確認していく。

キャリア教育では、前述のとおり基礎的・汎用的能力として、4つの柱を掲げて育成している。1つ目は、人間関係形成・社会形成能力。2つ目は、自己理解・自己管理能力。3つ目は、課題対応能力。4つ目は、キャリアプランニング能力である。

一方で、コンピテンシー能力は、21世紀型能力の「社会や他者との関係やその中での自律に関わる社会スキル」という資質・能力である。これを初等中等教育からの発達段階で

見直すと、小学校や中学校の段階では「どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」の学力を育てることにつながる。これが、小学校段階において将来に変化の激しい社会において生きる力となるコンピテンシーと言えよう。

キャリア教育の4つの能力と、コンピテンシー育成のための方向性を確認する。コンピテンシー能力を育成するために、小学校では「どのように社会・世界と関わるか」という点は、まさにキャリア教育の1つ目の柱である「人間関係形成・社会形成能力」に該当する。また、「課題対応能力」にもつながるだろう。また、小学校では「よりよい人生を送るか」に該当する点としては、キャリア教育における「自己理解・自己管理能力」や「キャリアプランニング能力」の育成が、こうしたコンピテンシーの育成に果たす役割が大きいと言えよう。

まさに、小学校キャリア教育は将来、大学教育において求められるコンピテンシーの育成につながるものである。コンピテンシー育成に向けて小学校におけるキャリア教育の果たす役割の重要性をあらためて確認したところである。

## 第6章 今後の小学校・生徒指導におけるキャリア教育の重要性

### 1 コンピテンシーを育てる大学教育から見た小学校での生徒指導の在り方

第5章において大学教育で育成すべき資質・能力として確認されたコンピテンシーだが、その育成にはキャリア教育が鍵になるということが明らかになった。しかも、育成すべき資質・能力の3つの柱のうちの1つが、これまで評価の難しさや明確な教科・科目や領域となっていなかったこともあって、指導対象としては軽重を付けた場合には、あまり重点化されていなかった「学びに向かう力や人間性等」となったことで、初等中等教育において、この3つ目の柱の中核を担う教科・科目、領域等が明確ではない。

国語や算数は、小学校の教育課程で6年間を通して指導する教科である。しかしこの2教科が、直接的に教科書を用いて、学びに向かう力や人間性を学ぶということは考えにくい。図工科や音楽科、家庭科や体育科など芸術・スポーツ系の教科でもこうした指導をすることはなかなか難しい。では、低学年で行う生活科や中学年から始まる理科や社会科ではどうかというと、これも教科書を確認すればわかることだが、学びに向かう力を指導したり人間性を育成したりすることは難しい。

そこで、残るは領域である。特別活動（学級活動）や道徳の時間、総合的な学習の時間はどうか。諸富の提案した「小学校でキャリア教育を実践するための9つのアディア」（表2参照）を見てもわかるように、キャリア教育と学級活動や道徳、総合的な学習の時間は関連性が深いことはあきらかである。

また一方で、キャリア教育と生徒指導の関連性の強い部分が、多角的に見て多いことがわかった。こうした教育課程の教科・領域等の縦の指導と、生徒指導やキャリア教育などの横の指導に複雑な関連性があり、それらが密接に連携して、一人一人の児童生徒のコンピテンシーを培うもととなる資質・能力として「学びに向かう力や人間性等」を育成することにつながっている。

つまり、道徳や特別活動（学級指導）や総合的な学習の時間など、教科・領域においてその学年の4月～3月までの縦の流れの中で、年間指導計画に位置付け、計画に基づいた指導の中で、育成すべき資質・能力の3つ目の柱である「学びに向かう力や人間性等」を育成していく。一方では、横の流れの中で教科横断的に、日常の学校生活の中でくりかえし

多様な場面（当番活動や係活動の時間、休み時間、給食の時間など）で、児童生徒に対して「学びに向かう力や人間性等」を指導することはできる。

児童生徒の発想からすれば、授業中だけしっかりやって、休み時間や放課後になったら気を抜いてしまうのでは、本当の生きる力として育成することはできない。教科・領域等の授業が終わった後でも、日々の生活の中で育成すべき資質・能力として「学びに向かう力や人間性等」の3つ目の柱が育てられるような指導が必要なのである。そこに位置付けられるものが、生徒指導であると言えよう。

## 2 生徒指導におけるキャリア教育の意義

キャリア教育は、小学校の教育課程でこれまで実践している教育活動の中に「宝」があると文科省は強調している。あらためて新しいことをする必要はない。これまでの教育活動を、新しい21世紀型学力を育てる面からとらえなおしていくとよいと学校向けパンフレットでも強調してきた。育成すべき3つの資質・能力の1つとして、基礎的・汎用的能力を掲げ、具体的に4つの能力を示した。

しかし、こうした能力は、これまでの教育課程における教育活動から再確認すれば見つかるとする文部科学省のとらえかたは、留意する点がある。それは、これまでの教育課程をそのまま眺め続けていても、キャリア教育の視点は見えてこない。教科書のどこかに書かれているかといった探し方では「宝」はわからないのである。

縦軸に位置づく教科・領域等の指導では、道徳や特別活動（学級活動）など、週1回の授業で実施されるという程度で限定されてしまう。大切なことは、こうした教科・領域等での指導を横軸でむすびつけて接着剤のような指導をする必要があるということである。こうすれば、道徳で学んだ価値観を特別活動で実際に体験的に学んでみることができる。そして、それを横軸から見て、日々の生活指導により学級担任等が声をかけていくことで、課題意識の継続化が図れるのである。

初等中等教育において生徒指導におけるキャリア教育を充実することは、21世紀型の能力として注目を浴びている「育成すべき資質・能力」の3つの柱の1つを育てるコアなプログラムである。これにより、高等教育の場である大学教育においてもコンピテンシーを育てる基礎となる。

単に、学級活動の時間に将来どんな職業につきたいかを話し合ったり、卒業前にどのような中学生になりたいかの思いを語ったりしていた時代は終わった。キャリア教育の視点が小学校の教育課程に位置付けられる、平成32（2020）年からの教育課程においては、単なる教科・領域等におけるキャリア教育では、大学教育までの系統的・体系的なプログラムの中では間に合わない。小学校の段階から、教科・領域等の授業の接着剤の例のように、教科・領域等の授業で学んだ学習に関する課題意識を継続して次の授業に生かしたり、日々の生活に生かしたりできるようにすることが求められる。この課題意識の継続には、横軸の流れとして教育課程に位置づく生活指導によって、キャリア教育を実践していくことが大事なのである。

## まとめと今後の課題

21世紀型学力が、平成27（2015）年の学習指導要領改訂によって注目をあびている。小学校では、平成32（2020）年から全面実施となる新しい教育課程において、キャリア教育はどのように実践していったらよいのか、学校現場の教員の叫びは大きい。

小学校教員だった筆者が、大学に籍を置き、大学生に教育を実践している現在、小学校段階での教育において指導してきたことがどのように成人に達する学生に影響を及ぼしているか手取るようにわかる。大学生になってから指導しても教育の可能性は否定しないが、一方でもっと早くから指導しておけばよかったと思われる点が多いのも事実である。

大学教育において 21 世紀型能力の育成<sup>30</sup>が叫ばれ、各大学では DP（ディプロマ・ポリシー）や CP（カリキュラム・ポリシー）、そして AP（アドミッション・ポリシー）の改革に全力で取り組んでいる。また、新たな育成すべき資質・能力として「コンピテンシー」の育成が注目されている。そんな状況において、初等教育の段階で何ができるのだろうか。

ここに一つの答えがある。それが本研究で結論として導いた、小学校の生徒指導においてキャリア教育をしっかりと充実させることなのである。その方法としては、教科・領域等の授業におけるキャリア教育に期待するだけでなく、横軸としての生活指導を活性化させ、児童がキャリア教育に関する学びについて、その課題意識が弱まらない内に、日々の学校生活の中で生徒指導を活用しながら課題意識の継続と高まりを導き、次の教科・領域等の授業につなげていくのである。

日常の小学校における生徒指導におけるキャリア教育が、中学校・高等学校の中等教育を経て、いつの日か大学という高等教育の場において、花開くこととなるための、その構造を明らかにできたと考える。

今後の課題としては、長期の研究となるが初等教育から高等教育にかけてのキャリア教育の成果を実証的に明らかにすることである。幸いに、小学校教員として指導していた児童が、本年度末から数年間経けて、大学を卒業することになる。

彼らにインタビューおよびアンケートによる調査を行い、小学校の時点でキャリア教育に関する指導を受けた記憶があるかどうか、そのキャリア教育は学級活動や道徳の時間のような教科・領域等の授業で行われた指導だったか、それとも生徒指導のような日々の担任との関わりの中で学んだことだったかについて確認していきたい。

平成 30（2018）年春に、大学を卒業する彼らにとって、小学校教育は遠い記憶の彼方にあるかもしれない。そこで、記憶をより確かなものにするために、彼らの保護者に対して再会して当時の思い出からキャリア教育に関する活動をつむいでいき、卒業アルバムをはじめとする写真や作文、文集などをふりかえてみたい。そして、小学校においては、生徒指導をはじめとする横軸によるキャリア教育の指導効果を証明していきたいと考えている。

## 注

<sup>1</sup> 文部科学省 平成 27 年 7 月『小学校学習指導要領』、165 頁。

<sup>2</sup> 中央教育審議会 平成 23 年 1 月「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」、29-30 頁。

<sup>3</sup> 同上書、31-37 頁。

<sup>4</sup> 文部科学省 平成 22 年 3 月『生徒指導提要』、4 頁。

<sup>5</sup> 同上書、4 頁。

<sup>6</sup> 同上書、4 頁。

<sup>7</sup> 文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター 平成 24 年 8 月「キャリア教育を『デザイン』する」、14 頁。

<sup>8</sup> 同上書、14 頁。

<sup>9</sup> 中央教育審議会答 平成 11 年 12 月「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、39 頁。

- <sup>10</sup> 同上書、10 頁。
- <sup>11</sup> 文部科学省 平成 29 年 6 月『小学校学習指導要領解説 特別活動編』。
- <sup>12</sup> 同上書、58 頁。
- <sup>13</sup> 同上書、59-60 頁。
- <sup>14</sup> 文部科学省 平成 23 年 5 月『小学校 キャリア教育の手引き<改訂版>』、13-15 頁。
- <sup>15</sup> 同上書、23-27 頁。
- <sup>16</sup> 同上書、16-17 頁。
- <sup>17</sup> 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター 平成 27 年 8 月『高校生の生活と意識に関する調査報告書』、33-36 頁。
- <sup>18</sup> 文部科学省 教育課程企画特別部会 平成 27 年 8 月「教育課程論点整理」、19-21 頁。
- <sup>19</sup> 同上書、6-7 頁。
- <sup>20</sup> 諸富祥彦 (2007) 第 1 章小学校からのキャリア教育はここがポイント『「7つの力」を育てるキャリア教育—小学校から中学・高校まで』図書文化、16-32 頁。
- <sup>21</sup> 同上書、第 2 章小学校キャリア教育の進め方、95-176 頁。
- <sup>22</sup> 文部科学省 大学審議会 平成 10 年 10 月「21 世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学— (答申)」。
- <sup>23</sup> 内閣府 平成 15 年 4 月「人間力戦略研究会報告書」。
- <sup>24</sup> 経済産業省 平成 18 年 2 月「社会人基礎力育成のススメ」。
- <sup>25</sup> 文部科学省 平成 20 年 12 月「学士課程教育の構築に向けて (答申)」。
- <sup>26</sup> 国立教育政策研究所教育課程研究センター 平成 25 年 3 月プロジェクト研究調査研究報告書「社会の変化に対応する資質・能力を育成する教育課程編成の基本原理」。
- <sup>27</sup> 安彦忠彦 2014 年 12 月『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり』図書文化。
- <sup>28</sup> 文部科学省 平成 26 年 3 月「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と 評価の在り方に関する検討会 — 論点整理—」。
- <sup>29</sup> 東風安生 (2017)「道徳性とコンピテンシーの関係性について-評価の視点から考える」平成 29 年度秋季大会日本道徳教育学会第 90 回大会自由研究発表より。
- <sup>30</sup> 望月由紀「特集入学者選抜 CASE 3 北陸大学」リクルート カレッジマネジメント 207/nov. -dec. 2017 。